

松本市島立条里的遺構

— 県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書 —

1988・3

松本市教育委員会

松本市島立条里的遺構

— 県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書 —

1988・3

松本市教育委員会



第1号住居址・土器出土状況



同上 (拡大)

序

島立条里的遺構は、島立地区の水田地帯に所在し、隣接する新村地区的条里的遺構とともに古代からの計画開発の跡ではないかと言われておりました。同遺構の調査は昭和58年以来行われてきたほ場整備事業の進展に合せて何回か実施され、今回で3回目であります。今回の調査も、今までと同様松本地方事務所からの委託により、当市教育委員会が実施したものです。この調査は埋蔵文化財保護のために行う記録保存を目的とした発掘です。

調査は市教委職員を中心に地元考古学研究者、地区の皆様の協力により、61年11月11日から12月13日の間行われ、多くの成果をおさめ、無事終了することができました。またその成果を記録として保存するための調査報告書も今度刊行されることとなり、島立地区的歴史的解明上役立つものと信じております。折しも周辺では、中央自動車道長野線建設工事、県道付替工事、これらに伴う発掘調査も大規模に行われており、近い将来には地区の様相も一変してしまう時、その歴史的記録をとどめておくことが、私達に課せられた責務と考えております。

最後になりましたが、調査にあたり多大なご理解とご協力をいただきました島立土地改良区はじめ、島立公民館、地元のみなさまに心から感謝いたしまして序といたします。

昭和63年3月

松本市教育委員会

教育長 中島俊彦

例　　言

1. 本書は昭和61年11月11日から12月13日にかけて行われた松本市島立条里的遺構に関する報告書である。
2. 本調査は県営は場整備事業に伴う事前の緊急発掘調査であり、松本市が長野県松本地方事務所より委託を受け松本市教育委員会が調査を行ったものである。
3. 本書の執筆は第2章第2節を太田守夫、第3章第3節1を直井雅尚が担当し、その他の項目を閑沢聰が行った。
4. 本書作成に関する作業分担は次のとおりである。

図整理：竹原学・土橋久子

遺構図トレース：藤井尚子

遺物実測：直井雅尚

遺物トレース：直井雅尚

5. 本書の編集は事務局が行った。

6. 調査地周辺では財長野県埋蔵文化財センターが発掘調査をしておりご指導を得た。記して感謝申し上げる。
7. 出土遺物及び図類は松本市立考古博物館が保管している。

目 次

第1章 調査の経過

第1節 事業の経緯と文書記録	1
第2節 調査体制	1
第3節 作業日誌	2

第2章 遺跡の環境

第1節 調査地の位置	5
第2節 地形と地質	5
第3節 周辺遺跡	8

第3章 調査結果

第1節 調査の概要	10
第2節 遺構	
1 住居址	16
2 墓址	20
3 土壌	21
4 溝	21
第3節 遺物	
1 土器	24
2 石器	32
第4章 調査のまとめ	33

挿 図 目 次

第1図 調査地の位置	3	第9図 墓址1	20
第2図 調査の範囲	4	第10図 土壌	22
第3図 土層断面図	7	第11図 溝	23
第4図 周辺遺跡	9	第12図 出土土器(1)	29
第5図 遺構配置図	11	第13図 出土土器(2)	30
第6図 トレンチ土層図	13	第14図 出土土器(3)	31
第7図 第1号住居址(上)・同出土状況(下)	17	第15図 出土石器	32
第8図 第2号住居址	19		

第1章 調査経過

第1節 事業の経緯と文書記録

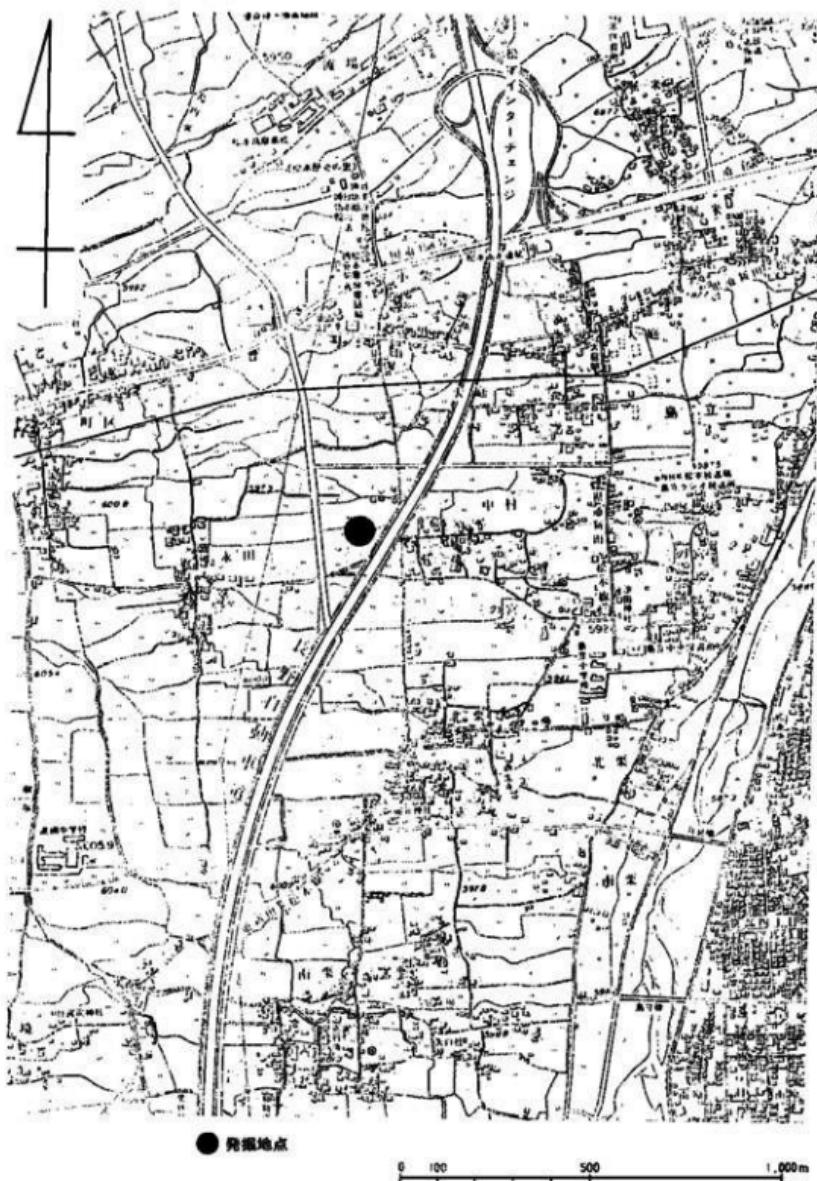
- 昭和60年10月9日 埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、中信土地改良事務所、松本市教育委員会。
- 昭和61年1月10日 昭和61年度補助事業計画書提出。
- 4月15日 昭和61年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定連絡。
- 5月1日 昭和61年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 5月30日 昭和61年度県営は場整備事業島立地区島立条里的造構II埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- 6月9日 昭和61年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 7月23日 昭和61年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 8月4日 昭和61年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 8月29日 昭和62年度埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 11月12日 島立条里的造構II埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 12月20日 島立条里的造構II埋蔵文化財拾得届及び同保管証提出。
- 12月23日 昭和62年度補助事業計画書提出。
- 昭和62年1月31日 島立条里的造構II埋蔵物の文化財認定通知。
- 4月28日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定連絡。
- 5月16日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 7月11日 昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 7月20日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 8月5日 昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。

第2節 調査体制

調査団長：中島俊彦（教育長） 調査担当者：神沢昌二郎（市立考古博物館長） 現場担当者：関沢聰（市立考古博物館）、木下 守（社会教育課） 調査員：太田守夫、竹原 学、三村竜一 協力者：伊丹早苗、乾 靖子、小原義人、開崎八重子、上條茂子、倉田芳雄、小松正子、塩原久和、住吉琢磨、田多井うめ子、土橋久子、鶴川健吾、巾崎助治、松本健速、松森幸子、村山三七、百瀬一子、若井七十郎 事務局：浜憲幸（社会教育課長）、岩渕世紀（文化係長）、柳沢忠博（主事）、熊谷康治（主事）、直井雅尚（主事）、岩野公子

第3節 作業日誌

- 11月11日（火） 曇り 重機により水田耕土を除去する。
用水路を2箇所切断し、トレンチ1・7を設定する。
- 11月14日（金） 晴れ 発掘資材の搬入。テントを設営する。検出を開始する。
- 11月15日（土） 曇り 検出を継続する。
- 11月17日（月） 曇り 検出を終了する。トレンチ1～4の掘り下げを開始する。
- 11月18日（火） 晴れ トレンチの掘り下げを継続する。土壤の掘り下げを開始する。
- 11月19日（水） 晴れ トレンチ・土壤の掘り下げを継続する。第1号・第2号住居址の掘り下げを開始する。
- 11月20日（木） 晴れ 1・2住の掘り下げを継続する。遺構の土層断面図を作成する（トレンチ1・3・5・6、土壌1～4・9・12）。
- 11月21日（金） 晴れ 1・2住の掘り下げを継続する。
- 11月22日（土） 晴れ 1・2住の掘り下げを継続する。1住の櫛土中（第1層直下）で大槻の集中箇所を検出する（後に授業によるものと判断する）。
- 11月25日（火） 曇り 1・2住、トレンチの掘り下げを継続する。1住では住居址南西部で一括の土器群を検出する。土壤の掘り下げを行う。トレンチ4の土層図の作成を行いう。
- 11月26日（水） 曇り 1・2住、土壤の掘り下げを継続する。2住ではカマド内から一括の土器を検出する。遺構の土層図を作成する（1・2住、土壌7・9・10）。
- 11月27日（木） 晴れ 1・2住の土層観察用の土手を外す。土壤の掘り下げを開始する。
- 11月28日（金） 晴れ 1・2住の床面精査。土壤の掘り下げを継続する。トレンチ7を設定、掘り下げを開始する。
- 11月29日（土） 曇り一時雨 1・2住の床面精査を継続する。トレンチ7の掘り下げを継続する。
- 12月1日（月） 晴れ 1・2住の平面図の作製を開始する。トレンチ7の掘り下げを継続する。墓址1の掘り下げを開始する。
- 12月2日（火） 晴れ 1・2住の遺物の取り上げを行う。墓址1内からは多量の骨・炭化物が出土するため平面図を作成しながら掘り進めめる。
- 12月3日（水） 晴れ 1住の遺物の取り上げを継続する。1・2住のカマド周辺を精査する。トレンチ7の掘り下
げを継続する。
- 12月4日（木） 曇り一時雨 1住のカマドを精査する。2住のカマド内遺物の取り上げを行う。墓址1の平面図・土層図を作成する。
- 12月5日（金） 晴れ（朝小雪舞う） 1住のカマドの土層図を作成し、付近の遺物の取り上げを行う。トレンチ7の掘り下げを継続する。
- 12月6日（土） 晴れ 1・2住の床面を再精査して住居に伴うピット等の有無を確認する。トレンチ7の掘り下げを継続する。
- 12月8日（月） 曇り 墓址1を床面精査の後、掘り上げる。土層断面図の作成を行う（土壌5・6、トレンチ2・7）。この結果、第3号住居址と溝4・5を新たに確認する。トレンチ8・9を設定し、掘り下げを開始する。
- 12月9日（火） 晴れ トレンチ8・9を掘り上げる。発掘調査地点の位置測量を行う。
- 12月10日（水） 晴れ 発掘区の全体写真を撮影する。遺跡全体図の作成を開始する。
- 12月11日（木） 晴れ 遺跡全体図の作成を継続する。
- 12月12日（金） 晴れ 遺跡全体図の作成を継続する。
- 12月13日（土） 晴れ 遺跡全体図の作成が終了する。今までの測量図を点検し、発掘を終了する。発掘調査の終了を関係機関へ連絡する。
- 1月12日（月）以降、報告書の作成のため遺物洗浄、注記、復原、拓影、実測、写真撮影、トレース、図版整理、原稿執筆を行っている。



第1図 調査地の位置



■ 調査範囲

0 100 m

第2図 調査の範囲

第2章 遺跡の環境

第1節 調査地の位置

島立地区は松本市のはば中央に位置している。地形的には梓川と頬川が形成した扇状地上にある。東側は北流する奈良井川によって区画されている。一帯はこれらの河川が形成した肥沃な土壤を利用して、主に水田として利用されている。また、奈良井川西岸の段丘崖周辺には南から南栗、北栗、三の宮などの集落が展開している。最近では、1988（昭和63）年3月の中央道長野線の開通にともない、周辺のは場整備や宅地化が進んでおり、地域の様相が変わりつつある。

今回の発掘調査地は長野県松本市島立2942～2947で、島立条里的遺構のなかではやや北よりに位置している。調査地区は東を中央道長野線、西を新たに付け替えた県道新田・松本線、南を三の宮から永田の集落へつながる市道で区画されている。海拔高は595m前後で、わずかに西から東へ低く傾斜している。

島立地区内の発掘調査は、松本市教育委員会によって1983年度から行われている。条里的遺構の調査としては1984（昭和59）年に中央道の西側一帯に延べ1570mのトレーナーを設定して土層の断面観察を行っている。1985（昭和60）年には北栗、永田、町の各地区内の灌がい用水路の変遷を調べるために3地点を発掘している。そこで今回の調査にあたっては調査地を面的に発掘して、現在の耕作土より下で過去の水田の畦や水路が検出されるか確認することを目的とした。実際の調査地点は市道の北側120mの水田に設定した。なお、調査地の東側20mの中央道長野線建設用地内を長野県埋蔵文化財センターが、西側90mの県道新田・松本線付け替え用地内を松本市教育委員会が発掘調査している。

第2節 地形と地質

1 位置と地形

本遺跡は松本市島立永田集落と中村集落の中間、新設の中央道長野線の西沿い50mに位置している。標高597m前後、平均傾斜9/1000で東ないし北東に緩く平坦面にある。

地形上は梓川扇状地に属する、沖積扇状地性の堆積である。土壤深度60cm以上と報告されている水田地帯で、条里的遺構として発掘された。水田耕土の下は、氾濫原状の堆積で、同時異相の砂礫層と土層が介在する。扇状地面での位置は扇尖（中流）に当たり、礫の大きさは小・中礫が中心で、大礫を混在する。介在する土層の場所は、表土の土層が加わって、厚さが1mを超えることになる。

2 堆積層と礫、遺跡の立地

第3図は調査地の周囲の壁でみられた、堆積層の断面を示したものである。これを模式的にすると、上から1. 水田耕土（灰色・灰白色）、2. 黄褐色土（斑鉄が入る）、3. 黄褐色土（斑鉄が増す）、4. 赤褐色～濃褐色～黒褐色（鉄・マンガンの汚染、盤土状）、5. 濃褐色～黒褐色、6. 矽層となる。2・3からは中世の遺構・遺物が、4・5からは平安時代の遺構・遺物が報告されている。

発掘面でみられる矽層は、南西隅から北壁の中央部へ（幅約8m）と、南壁中央から北東隅へ（幅約4m）の2条で、いずれもN-60°-Eの北東流と考えられる。N-60°-Eは90m程西の新設県道の調査地においても同様で、この付近の一般的な流れの方向と考えられる。本遺跡の矽層は、新設県道の調査地3地区の矽層に連続しているのがみられる。

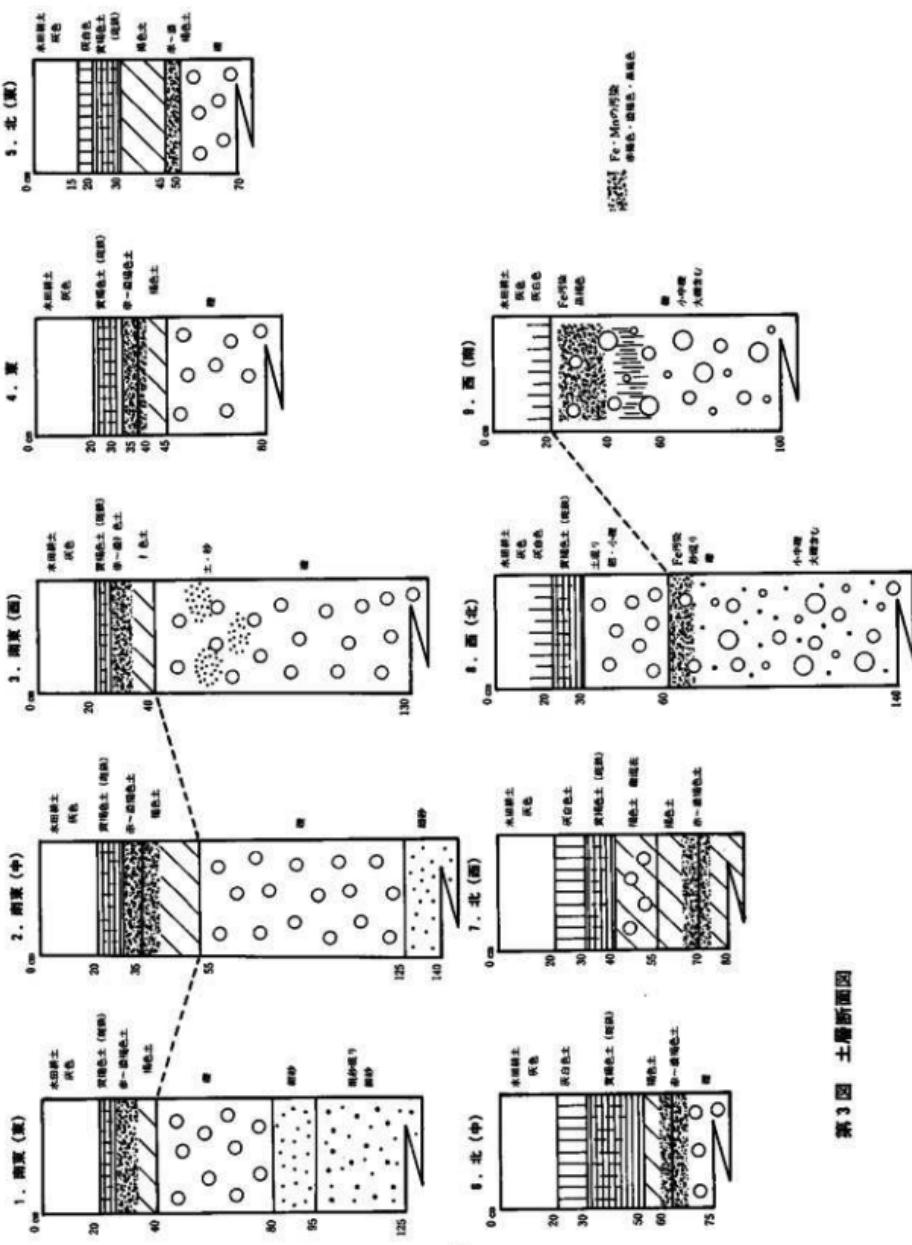
矽層内はすべて一様でなく、場所的には土層をはさんだり、西壁でみられるような傾きを示している。矽層と矽層の間には、前述のように土層が発達し、住居址が発見されている。

また、北壁中部から調査地中央を経て、北東隅に向かう弧状の溝1（最大幅1.5m）が発見された。これが明らかに遺構であることは、流れの断面を示す堆積と砂質の堆積層、溝が矽層を切ってほぼ東西性を示していることから証明された。

南壁の南西隅近くにも、同様な流れの断面と堆積を示す砂質層があったが、これとの結び付きは確認できなかった。

南壁の南東隅に現れた矽層の落込み（地層断面1・2・3）は、南北性でN-60°-Eの流れの方向を切っているが、連続不明で確認できなかった。

矽層の礫の種類は、硬砂岩・砂岩・ホルンフェルス（砂岩・粘板岩）・チャート・粘板岩・花崗岩・安山岩の円礫で、砂岩類が大多数を占め、いずれも梓川系統のものである。礫の大きさは、最大径15×10cm、大多数は径5×4、4×3cmの中礫が多かった。



第3圖 土層斷面圖

第3節 周辺遺跡

奈良井川西岸の島立地区周辺には多くの遺跡が分布している。西方の新村地区では終末期古墳で知られる秋葉原遺跡・安塚古墳群がある。南方では鎮川を渡った右岸に下神・町神・下二子・中二子遺跡などの奈良・平安時代を中心とした集落遺跡が展開している。さらにその南方ではくまのかわ・神戸遺跡があり、奈良・平安時代のはかに縄文時代の遺構・遺物が出土している。また、西南方には和田・西和田遺跡がある。和田八幡原では旧石器時代の遺物（東内野型尖頭器）が出土している。さらに南方の鎮川左岸には川西・川西開田・三間沢川左岸・境窪遺跡が分布している。境窪遺跡では弥生・平安時代の遺物が出土している。三間沢川左岸遺跡は1987（昭和62）年に松本市教育委員会によって発掘調査され、平安時代の竪穴式住居址130、建物址11ほかが検出され、綠釉陶器、八稜鏡、帶金具、「長良私印」銘の銅印などが出土している。

島立地区内の遺跡については、新村・島立条里的遺構とされている巨大な遺跡のネット内に複数の集落遺跡が包含されている。条里的遺構の西南部には高綱中学校遺跡があり、竪穴状遺構・建物址が調査されている。また、奈良井川左岸の段丘上には北から三の宮・北栗・南栗遺跡が展開している。この3遺跡については、最近の長野県埋蔵文化財センター、松本市教育委員会の発掘調査によって膨大な資料が得られている。その成果は一部が既に報告されている。しかし、この地域の発掘調査は今後も予定されており、現在も調査・整理は継続中である。これらの資料の総合的な歴史的位置づけは今後に残された課題である。

なお、今回の調査に並行して、県道新田・松本線バイパス工事に伴う発掘調査を発掘地点の西側で行っている。その結果、古墳時代末から平安時代の竪穴式住居址15軒、建物址9、櫛列2、土壙・ピット多数ほかを検出している。また、1987年には県道に西接する永田地区的水田を発掘して、奈良・平安時代の集落（竪穴式住居址17・建物址6・溝2）がさらに西へ続いていることを確認している。

上記のはかにも、1987（昭和62）年は島立地区内で発掘調査が行われている。北栗地区的島立小学校校舎の東側ではグランドの造成とほ場整備事業に伴う緊急発掘調査で古墳時代後期から平安時代後期の集落を検出している。特に、古墳時代後期の集落資料（グランド地点）は島立地区周辺の古代の集落変遷を考えるうえで貴重な資料となった。また、現在の永田集落の北北西の水田の発掘調査では、方形の周溝に区画された中世の居館址と考えられる遺構（竪穴状遺構8・土壙17・ピット315）と、多量の遺物（内耳土器・土師質土器・陶磁器・硯・石臼・鉄器・宋銭・炭化米ほか）が発掘されている。また、小柴地区的発掘調査では、遺構は検出されなかったが、北宋銭1点・陶磁器30点ほどが出土している。



● 発掘地点

0 500 1,000 2,000m

1. 島内遺跡群
(1984~87)
2. 安塚古墳群 (1978)
3. 秋葉原遺跡 (1982)
4. 新村遺跡
5. 新村・島立条里的遺構
(1984~87)
6. 高綱中学校遺跡 (1984~85)
7. 三の宮遺跡 (1986)
8. 北葉遺跡 (1985~87)
9. 南葉遺跡 (1983~85)
10. 西和田遺跡
11. 和田町遺跡
12. 梶海波遺跡 (1985)
13. 下神・町神遺跡 (1983)
14. 下二子遺跡
15. 太子堂遺跡
16. 川西遺跡 (1986)
17. 南荒井遺跡
18. 中二子遺跡
19. 三間沢川左岸遺跡
(1987)
20. 川西開田遺跡
21. 塙座遺跡
22. くまのかわ遺跡 (1981)
23. 神戸遺跡群 (1979)

) 内市教委調査年度

第4図 周辺遺跡

第3章 調査結果

第1節 調査の概要

1 調査の概要

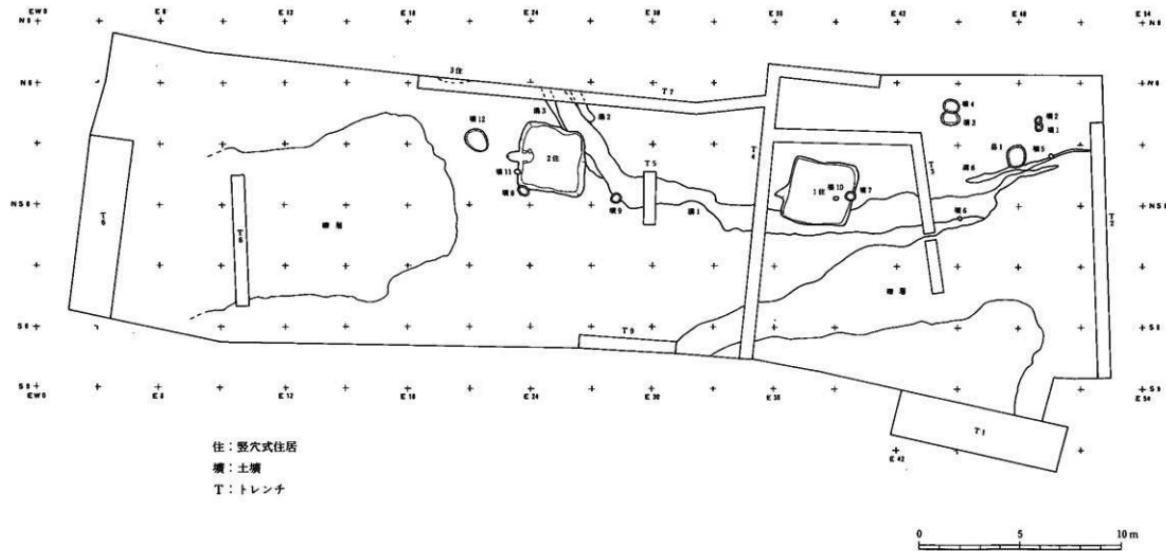
今回の調査予定地は東側を長野県埋蔵文化財センターで調査を行っており、西側を松本市教委が県道新田・松本線のバイパス工事に先だって発掘調査を実施している。そこで、今回の調査はその間の遺構の分布状況を確認することと、調査予定地内で現在使用されている用水路の変遷、あわせて耕作土下で過去の水田・畦が検出されるか確認することを目的とした。そのため実際の調査地は用水路にそって東西に長く設定した。その結果、実際に発掘調査を実施したのは1354m²である。

調査にあたっては重機を使用して耕作土を除去している。また、遺構の検出後は調査区の西側に任意の基準点を設け発掘区を1辺3mの方眼で覆って遺構の測量を行った。なお、遺構配置図・遺構測量図のN・S・E・Wは方位を表し、数字は基準点からの距離(m)である。

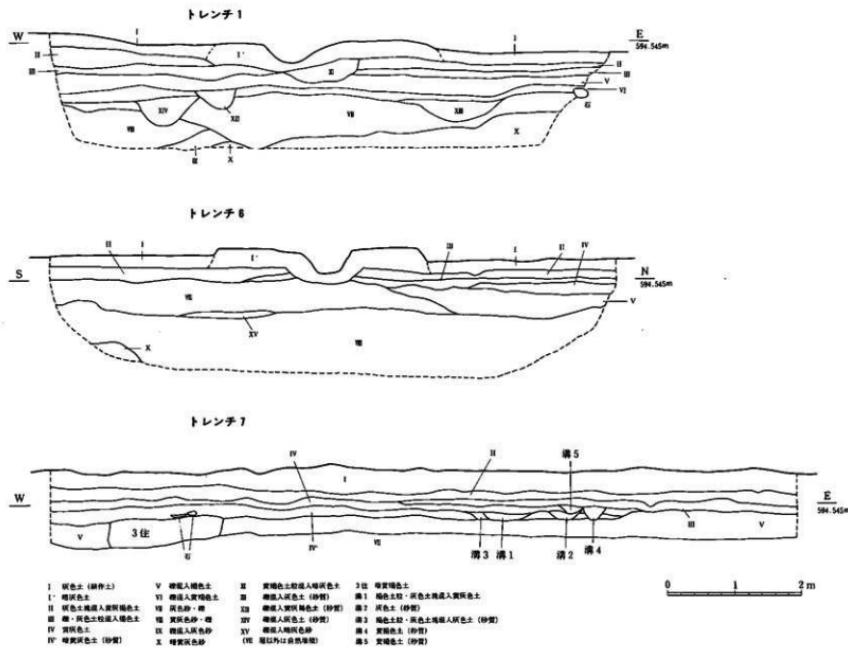
発掘の結果、竪穴式住居址3、墓址1、土壙12、溝6を確認することができた。これらのうち、遺構の時期については、第1・2号住居址は平安時代前期に属するもので、第2号住居址のほうが若干古い様相を見せている。墓址1は他の遺構よりも検出面が高いので本遺跡のなかでは新しい時期に属するものである。出土遺物がないので時期は特定できないが中世の遺構と考えている。土壙では土壙4で奈良時代末の須恵器を出土している以外は遺物の出土がなく、時期は特定できなかった。溝はレンチ7の土層断面の観察から検出面は2枚あり、溝1・2・3が溝4・5よりも古いことが判明している。時期については溝1・3は第2号住居址よりも古いことから平安時代前期かそれ以前である。その他の溝については時期を特定できなかった。

出土遺物としては検出面・遺構から須恵器・土師器・灰釉陶器・砥石が出土している。遺構からの遺物としては、第1号住居址で床面の南西隅から須恵器・土師器・灰釉陶器8点が一括で出土している。また、第2号住居址ではカマド内から土師器の甕・須恵器の壺が良好な状態で出土している。住居址以外の遺構からの遺物の出土はほとんどなかった。また、今回の調査で出土した土師器・須恵器・灰釉陶器のうちの8点に墨書き・刻書がみられた。特に第1号住居址からは4点が出土している点が特徴である。なお、検出面では奈良時代後半の土器が検出されているので、付近に該期の遺構があるものと考える。

以上のことから、今回の調査部分では平安時代前期の集落の一部分が確認されたと考えられる。しかし西側の県道バイパス工事と東側の中央道長野線建設工事に伴う発掘調査では古墳時代末から



第5回 遺構配置図



第6図 トレンチ土層図

平安時代の住居址群と中世の墓壙群が発掘されているので、本遺跡も周辺の発掘調査の成果を総括したなかで捉えていかなければいけない。

2 土層

今回の調査では検出と並行して現在使用されている用水路の土層断面を観察するためにトレンチ1・6、造構の有無・土層の堆積状況を確認するためトレンチ2～5・7～9を設定した。

これらのうちトレンチ1・6・7の土層図を掲載している。土層の概要は次のとおりである。

I層 灰色土 耕作土

I'層 暗灰色土 基本的にはI層と同じだが、珪・用水路周辺に自生する植物によって幾分腐食化している。

II層 灰色土塊混入黄灰褐色土

上層から溶脱してきた鉄分が集積している層である。

III層 磨・灰色土粒混入褐色土

トレンチ1では全体に堆積しているが、トレンチ6では北半部、トレンチ7では東半部に確認している。

IV層 黄灰色土 トレンチ6の西半部、トレンチ7にみられる土層である。本層からは溝4・5が検出されている。

IV'層 暗黄灰色土（砂質）

トレンチ7にのみ観察されている。土層断面の観察では溝1～3が検出される。本層とIV層の違いは溝1～5の掘り込み面の高さの違いで認識できるが、色調はほとんど変わらず、本層のはうがやや砂質を帯びている。

V層 磨混入褐色土

すべてのトレンチで確認されている。本層からは第3号住居址が掘り込まれている。なお、トレンチ7ではIV'層中の溝4の東側70cmのところで12cm前後高くなり、そのまま東へ続いている。そのため、実際の発掘時の検出面は本層上面とIV'層上面である。

VI層 磨混入黄褐色土

トレンチ1で観察されている。厚さが8～23cmと一定していないが下層とは明瞭に区別される。

VII層（～X層） 灰色砂・磨

本層より下層にあるものはすべて砂礫がほとんどで、自然堆積によるものと考えられる。

なお、II層より掘り込まれているXI層は黄褐色土粒混入暗灰色土で木根・灰色粘質土を含んでいる。現在使用されている用水路以前の旧水路だが比較的新しい時期と考えられる。

第2節 遺構

1. 住居址

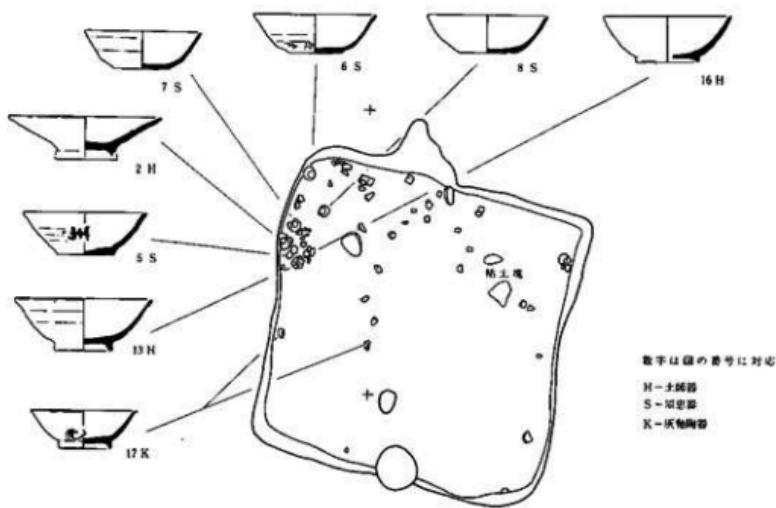
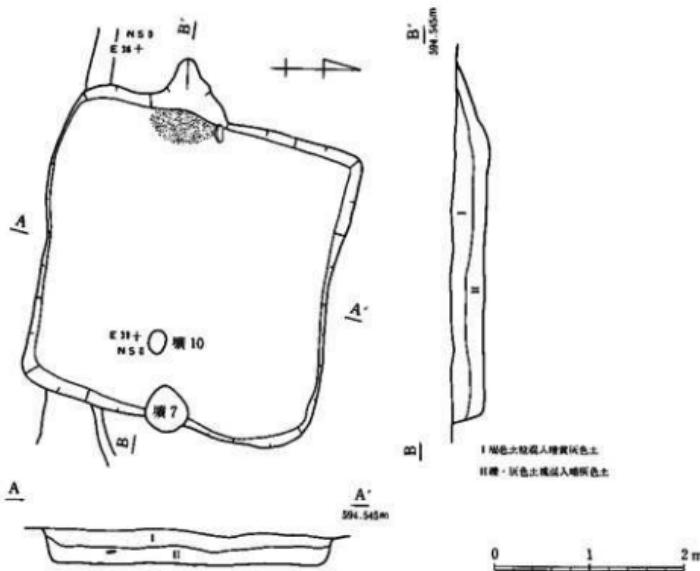
第1号住居址

本址は発掘区の中央、やや東寄りに位置し、溝Iよりも新しく土壌10・7よりも古い。規模は南北3.2×東西3.7m、面積10.14m²で、煙道部分を除けば平面形が方形を呈し、主軸方向はN-74°-Wである。遺構検出面はV層上面である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの壁高は35cm前後である。覆土は上層が褐色土粒混入暗黄灰色土、下層が礫・灰色土塊混入暗灰色土である。特に住居址南西部の下層上面には拳～小児の頭大の礫がまとまって出土している。これらの礫は本址が廃絶された後、覆土の第II層が堆積した段階で投棄されたものと考える。床面はV層直下まで掘り込まれている。床面は礫まじりでやや堅く、一部に鉄分とみられる赤褐色の沈積がみられた。

カマドは西壁のほぼ中央にあり、石芯粘土カマドと考えられる。北側にはカマドを構築した石が1点残っていた。カマド内は浅く掘りくぼめられ焼土がみられた。煙道は55cm程のびており、奥壁から緩やかに立ち上がっている。煙道の底面では灰が帯状に堆積していることが確認された。なお、住居址の南西部の床面よりわずかに高いところで25cm大の礫、北西部で粘土塊が出土しているが、カマドとの関係は不明である。ピット等の住居に伴う施設については、床面を精査したが検出されなかった。

遺物は覆土、床面から多量の土師器（壺・楕・皿・鉢・甕・小形甕）・須恵器（壺・甕）・灰釉陶器（碗・皿）が出土している。このうち覆土内出土のものは、第II層の堆積後に礫の人为的投棄がみられるため本址の資料としては適当でない。床面・床面直上の遺物は住居址のカマド周辺と南西隅でまとまってみられた。前者では土師器の甕の破片が多く出土している。後者では土師器の楕2点・皿1点・須恵器の壺4点がまとまって出土している（出土状況図参照）。これらは須恵器の1点（5S）を除いて、伏せた状態で置かれていた様相を示していた。また、土師器の楕（13H）から65cmと100cm離れた地点の床面直上からは同一個体になる灰釉陶器が出土している。本資料は出土状態も良好で一括資料として考えられるものである。なお、これらの土器のなかには文字資料をもつものがある。6Sの須恵器は意味不明の縦刻に混じって「在」の刻書がある。また、須恵器の5Sに「生」字が、灰釉陶器の17Kに判読不明の字が墨書きされている。なお、本址ではこのほかに須恵器の壺（4S）と土師器の壺（19H）に「東」字の墨書きがみられた。土器以外の遺物としては砾石が1点出土している。

本址の時期については出土した土器からIX期と考える。



第7图 第1号住居址(上)・同出土状况(下)

第2号住居址

本址は発掘区の中央、北寄りに位置し、溝2・3よりも新しく土壙8・11よりも古い。規模は南北3.2m×東西3.8m、面積10.25m²で、煙道部分を除けば平面形が不整の方形を呈し、主軸方向はN-82°-Wである。遺構検出面はIV層上面である。壁は南壁はほぼ垂直に立ち上がるが、その他の壁は斜めに立ち上がっており、検出面からの壁高は40cm前後である。これは壁が礫を多量に含むV層中に構築されているため垂直に掘れなかつたか、住居の廃絶後に壁が崩れたものと考えたい。覆土は上層が礫・褐色土粒混入暗灰色土、下層が礫・褐色土粒・灰色土塊混入暗灰色土で第1号住居址に類似している。床はV層下のVII層上面まで掘り込まれており、黄灰褐色土の床面は堅くはないが直下でVII層の砂礫が検出されるので区別できる。

カマドは西壁の中央にあり、石芯粘土カマドである。北側にはカマドを構築していた花崗岩の礫が2点、南側でひん岩の礫が1点残っていた。なお住居址の南東隅の床面上12cmで花崗岩の礫が1点出土しているが、カマドとの関係は不明である。カマドの底面は浅く掘りくぼめられ、灰・焼土がみられた。底面の中央には甕を支えるための支柱石が立てられており、表面は被熱により赤色化していた。この被熱は前述の花崗岩・ひん岩では観察できなかった。煙道は60cm程西へのびており、奥壁から緩やかに立ち上がっている。煙道内には灰・焼土がわずかにみられるものの覆土の下層とほとんど区別できなかった。

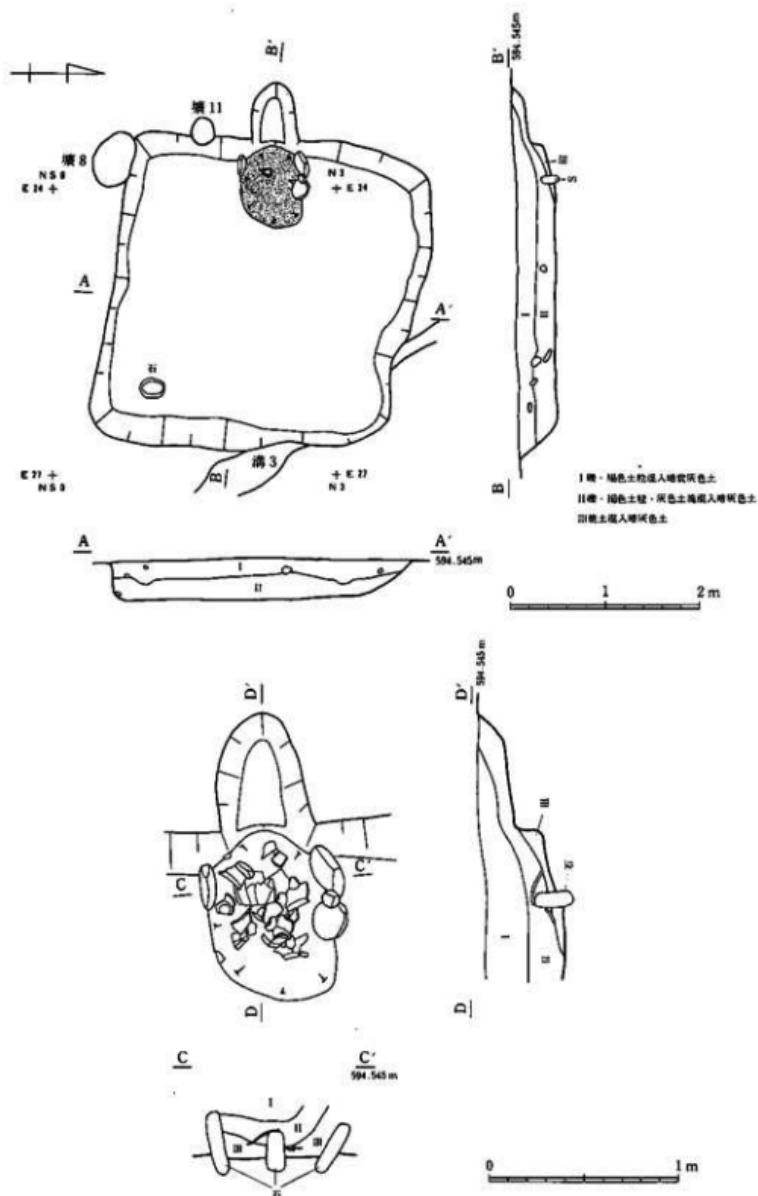
ピット等の住居に伴う施設については、床面を精査したが検出されなかった。

遺物は覆土・床面・カマド内から土師器（壺・椀・甕・小形甕）・須恵器（壺・蓋・長頸壺・広口壺・甕）が出土している。本址では覆土・床面からの遺物は少ない。床面からの遺物としては住居の南西部で土師器の甕、中央ややカマド寄りで須恵器の広口壺（35S）の破片・完形の壺1点（29S）が出土している。カマド内出土の土器はカマド内の中央から奥壁、両側の石芯間にかけてみられ、支柱石に覆いかぶさるような状態で出土している。土器には須恵器の壺1点（25S）・ヘラ記号をもつ長頸甕の底部破片1点（34S）・甕の破片、土師器の甕2点（38H・39H）がある。このうち甕38Hはほぼ完形であるが、ほとんどの破片の色調が黄橙～赤橙色であるのに一部の破片は破損部の断面まで黒褐色を呈していた。このことは38Hが一度破損した後もカマド内で被熱したものと考えられる。39Hは口縁から胴部までの破片である。このことから、カマド内の土器は出土状態からみて本址に伴うものではあるが住居の廃絶時にまで使用していた土器かは不明である。なお、本址からも墨書き器2点が出土している。ともに土師器の壺であるが判読不明である。

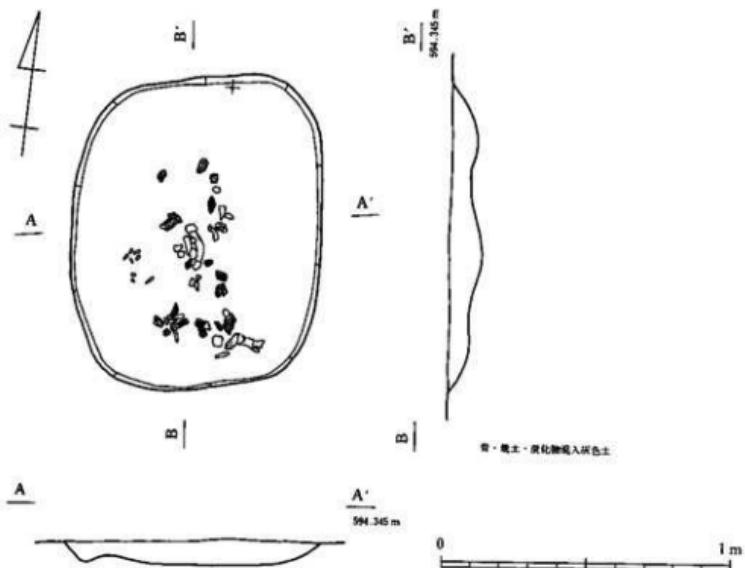
本址の時期は上記の遺物から第1号住居よりも若干古い時期が想定され、VII-VIII期と考えられる。

第3号住居址

トレチ7で幅1.7m、深さ0.4mの大形の土壙が検出されている。平面では確認できなかったので規模等は不明である。暗黄褐色土の覆土中には須恵器の壺の破片等が採集されている。壁が垂直に立ち上ること、他の土壙とは深さの点で区別できるので住居址とした。時期は不明である。



第8図 第2号住居址



第9図 墓址1

2. 墓 址

墓址1

今回の調査で検出された墓址は1基である。本址は発掘区の東側に位置し、溝6よりも新しい。規模は南北106cm×東西87cmで、平面形は隅丸長方形を呈している。主軸方向はN-5°-Wである。造構検出面はⅢ層（疊・灰色土粒混入褐色土）中で、他の造構面よりも高い。覆土は骨・焼土・炭化物を多量に混入する灰色土で、灰色を呈するのは燃焼にともなって生じた灰が原因と考える。検出面からの覆土の厚さは7~11cmである。壁は緩やかに斜めに立ち上がっている。底面は平でなく凹凸が激しい。なお、底面では被熱による土色の変化等はみられなかった。本址内の中央から南部にかけては骨・灰が厚く積もった状態で出土している。骨は一部は良好に残存していたが、多くは軟質で粉状になっていた。

遺物は土器の破片1点が出土しているが、本址に伴うものか不明である。

本址の時期は出土遺物から推定することは不可能だが、今回調査した造構のなかでは新しいものである。なお、東側で長野県埋蔵文化財センターが調査した三の宮遺跡では墓壙と考えられる中世の土壤群が検出されているので、本址も墓域の一部を構成していた可能性がある⁽¹⁾。

注1 長野県埋蔵文化財センター『長野県埋蔵文化財センター年報3』(1987)

3. 土 壤

今回の調査で検出された墓址以外の穴をすべて土壤として扱った。土壤は12基が検出されている。これらは発掘区の東半部の北寄りに集中している。規模は直径50cm未満の平面形が円形のピット状を呈し、暗灰色土の覆土をもつものが多い。覆土の厚さは最も深いもので20cmしかなく、底面が皿状を呈すもののがほとんどである。

遺物は土壤4から須恵器の有台坏1点(43S)が出土している。そのほかの土壤からの遺物の出土はない。

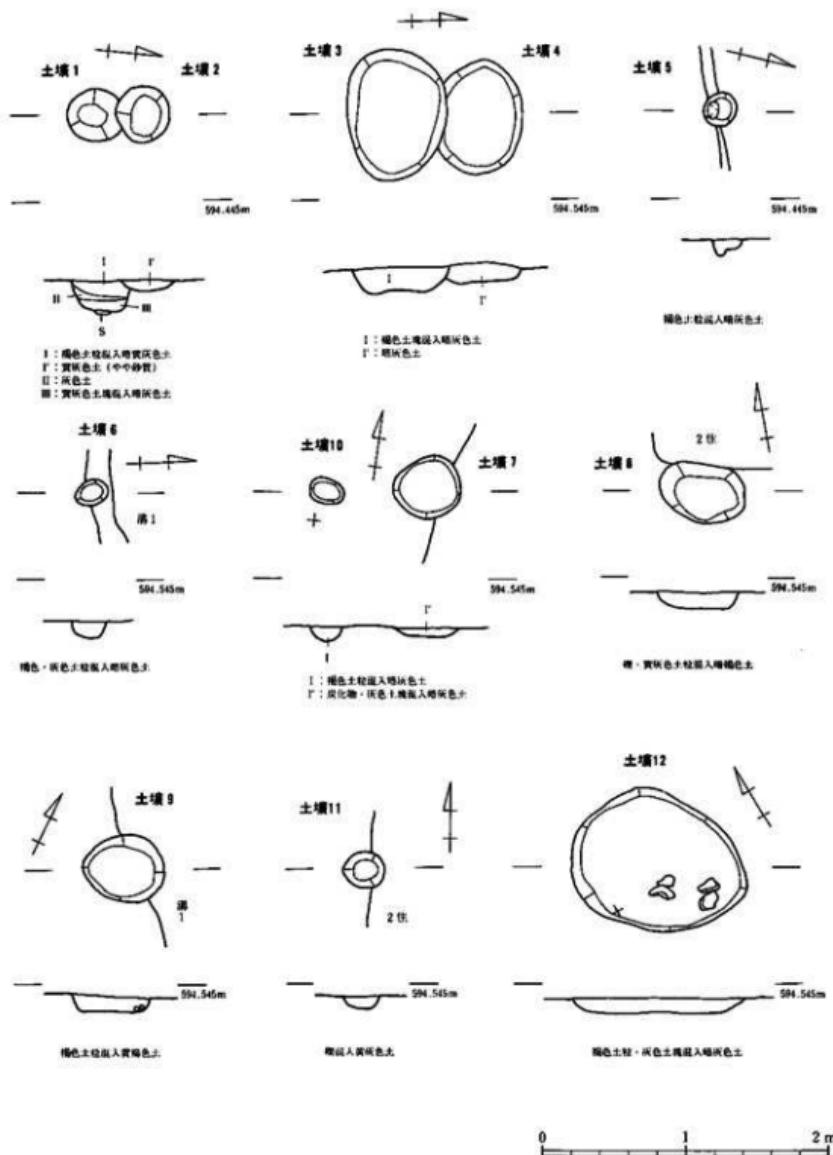
土壤の時期については、土壤4が出土遺物から奈良時代後半以降と推定される。そのほかの土壤については時期を明確にできなかった。ただし、2軒の住居址よりも新しい土壤7・8・11・12は平安時代前半かそれ以降である。

4. 溝

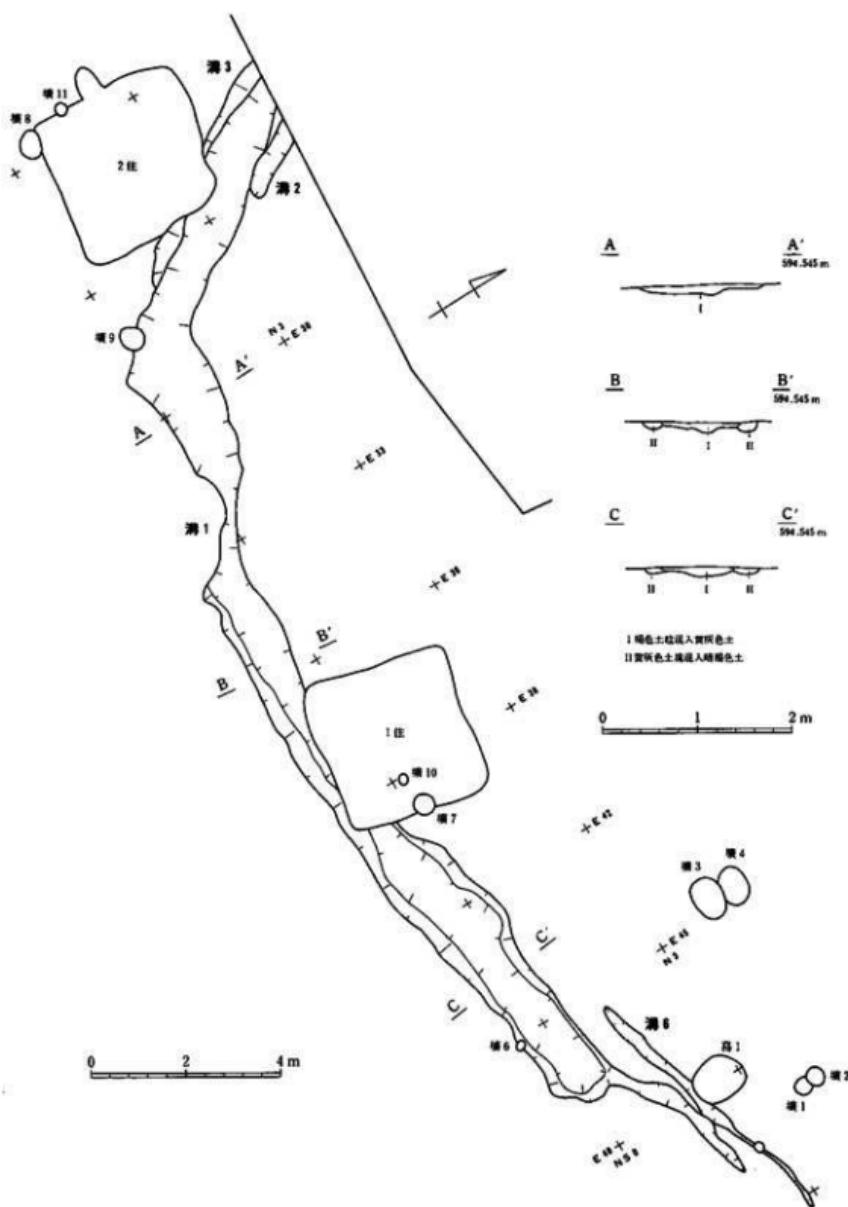
今回の発掘調査で検出された溝は6本である。このほかに河川の氾濫による自然流路が発掘区の南壁中央から東壁にかけてみられた。溝1は発掘区の北壁中央から南へわずかにふくらみながら東へのびている。溝3・6よりも新しく、溝2・第1号住居址・第2号住居址・土壤9よりも古い。溝の幅は1.0~1.7mで、西側ではしだいに細くなって明確な輪郭を確定できなかった。検出面からの深さは10cm前後で浅く、覆土は溝の底面の両側に黄灰色土塊混入暗褐色土が、そのうえに褐色土粒混入黄灰色土が堆積していた。底面の高さから本址は西から東へ低く流れていたと考えられる。溝2は発掘区の中央北壁よりに位置し、溝1の東側で切り合っており溝1よりも新しい。溝の幅は40cm前後で1.5m程検出している。溝3は発掘区の中央北壁よりに位置し、溝1の西側で切り合っており溝1・第2号住居址よりも古い。溝の幅は不明だが5.0m程を検出している。溝6は発掘区の北東部にあり溝1よりも古い。溝の幅は5~18cmで6m程検出している。覆土は砂質の黄褐色土で厚さは2~4cmと浅い。溝4・5はトレンチ7の土層断面で溝1~3とともに検出されている(第6図参照)。

トレンチ7ではIV層(黄灰色土)に溝4・5が、IV'層(暗黄灰色土)に溝1~3が検出された。溝4・5は切り合い関係にあり溝5が新しい。覆土はともに砂質の黄褐色土で3mm未満の砂礫が多く混入し堅くしまっているが、溝5のほうが褐色の度合が強い。溝1は溝3よりも新しく、覆土は褐色土粒・灰色土塊混入黄灰色土である。溝3は砂質の褐色土粒・灰色土塊混入灰色土で、3mm前後の礫を含み堅くしまっている。溝2は溝1の東20cm、溝5の直下に位置している。覆土は砂質の灰色土で、下へいくにつれ砂粒は細くなり堅くなっている。

以上の検出面とトレンチ7の観察所見から溝1~6は水が流れていた溝と考えられ、これらの新旧関係は、溝3・6→溝1→溝2→溝4→溝5となる。溝の時期については出土遺物がないので確定できなかった。しかし、溝1は第1・2号住居址よりも古いことから、溝1・3・6についてはIX期以前に推定できる。



第10図 土壌



第11図 溝

第3節 遺物

1 土器

(1)出土土器の提示方法と概要

すべての出土土器のうち口径ないしは底径の復元できるものは、出土遺構ごとにまとめて図化提示した。また墨書のあるものについては、上記の条件を満たさなくても、その重要性を認め図化を図った。図化提示できない破片はすべて種別・器種、場合によっては器形まで分類し、重量を計測することにより図上では表せない出土土器群の様相を読み取るように努めた。

今回調査では、2軒の竪穴住居址覆土・底面及び遺物包含層・遺構検出面から土器の出土をみているが、調査規模に比例して、量的にはさほど多くない。第1号住居址出土品の一部に、意図的な廢棄の痕跡が見られ、一括遺物と認定できる可能性がある⁽¹⁾ほかは、無作為・無秩序な出土状態を示した。土器の種別は、土師器・須恵器・灰釉陶器に限られており、各器種の形態・手法及び器種組成からみると、いずれも概ね当地方の平安時代の所産に位置付けられるものである。

(2)土器の種類・器種

①土師器

壺・椀・皿・甕・小形甕⁽²⁾の器種が見られる。「黒色土器」「内黒土師器」などと称される壺類などの内面を黒色処理⁽³⁾したものは、ここでは土師器に含める。

a. 壺 10・11・19・28~33があたる。形態は、平な底部からやや内湾気味の体部が大きく開く逆台形。成形・調整技法（以下「技法」と略す）は、第一に、底部外面に顯著な回転糸切痕、体部外面にロクロナデ痕が観察され、製作のある段階でロクロが使用されている。第二に、内面は全面的にミガキが施される（ミガキの方向は中央部放射状、口縁端部付近は横）。さらに焼成時に、内面黒色処理がなされるものが多い。寸法の上からは、口径13~14.5cmと、16cm以上の大小二種に分かれるようだ。

b. 椿 13~16があたる。形態は、壺に高台が付く。技法も壺と同様で、回転糸切り痕を残す底面の外周に高台を付してヨコナデを行っている。寸法は口径13.5~15cmを測る。

c. 皿 1・2があたる。形態は、高台をもつ平な底部から体部が大きく直線的に外開する。技法は、基本的に前述壺・椀類と同様だが、内面ミガキが横方向のみとなる。寸法では、口径が14cm前後のものと、16cmを超えるものの2種がある。

d. 鉢 12があたる。形態・技法ともに壺C同様で、いわば壺Cの特大品といったところである。今回は底部破片のみだが、他例⁽⁴⁾から推定すると、寸法は口径20cm以上、器高8.5~10.5cmくらいになる。まれに、口縁部が肥厚し上端を平に面取りされるものや、片口付がある。

e. 窯 20~22・39・45があたる。技法および焼成から見て明らかに異なる2群がある。一つは、胴部外面の縦方向のハケメを特徴とし(窯E: 20~22・39)、他は薄手で焼成が良く、胴部外面に強く施されたケズリを特徴とする(窯F: 45)。窯Eは、形態は長胴形を呈し、胴部上半に最大径をもって、底部は比較的大きな平底となる。技法では、胴部は外面のほぼ全面に縦方向のハケメが施され、内面は上 $\frac{1}{2}$ にナデ・オサエ、下 $\frac{1}{2}$ に外面のハケメに対応するような縦方向のナデによる細長く浅い溝状の痕跡が残る。口縁部は、外面にヨコナデ、内面に胴部外面のハケメの原体と同一のものを用いてロクロの回転を利用したと考えられるカキメが施される。窯F₍₅₎は、形態・技法ともに今回の資料のみでは全体像がつかめない。他例₍₆₎を加味すると、形態は口縁端部域は胴部上半に最大径をもち、頸部がゆるくくびれる、底部のきわめて小さい砲弾形を呈す。技法では、とにかく全体的に薄く仕上げられ、口縁部は強いヨコナデ、それ以下は横・斜め・縦の順に強いケズリが行われ、それが底面まで及んでいる。内面にはナデ・オサエの痕跡が残る。

f. 小形窯 18・36~38があたる。形態は、今回は全形のわかるものがないが、最大径が胴部上半~中位にあり、やや縦長の球形の胴部から「く」の字に短く外開する口縁をもち、底部は大きめの平底となっている。技法では、ロクロが用いられたことは明らかで、底部外面に回転糸切り痕、胴部外面と口縁部内面にカキメ、胴部内面にロクロナデが観察される。寸法は、器高が15cm未満の文字どおり小形のものから20cmを超えるものまであり、しかも、他例₍₇₎を参考にすると、大小の群に分かれるということなくその間で様々な大きさをとるようだ。38は底部外面に糸切り痕を持たず、内面底部・胴部の接点にオサエの痕を残すなど、この器種が成形段階は粘土紐巻き上げによっていることを窺わせる好資料だが、更に外面のカキメが全体にわたらず帯状であることや内面の一部にハケメを持つなど特異である。以上の、胴部外面と口縁部内面にカキメを持つもののほかに、底面の回転糸切り痕は同様だが胴部・口縁部は内外面ともロクロナデのみという小形窯も少量存在する。形態・寸法についてはカキメのものと同一である。両者を区別するためにカキメのものを小形窯E、ロクロナデのみのものを小形窯Fと便宜的に呼称する。

②須恵器

坏・有台坏・蓋・長頸壺・広口壺・短頸壺・甕類の器種が見られる。

a. 坏 4~9・24~27・40~42があたる。形態は、平な底部から直線的或は僅かに内湾する体部が大きく外開する、逆台形を呈する。41のように底部と体部の境界にわずかに外反部をもつものもある。技法は、すべての底面に回転糸切り痕が残され、体部にはロクロナデ痕が明瞭である。寸法は、ほとんどが口径12.5~14cm・器高3.5~4cmの範囲に収まる。焼成状態では、明らかに異なる2群が見られる。一つは從来の須恵器で色調が青灰色系統を示し硬い焼きのもの(24・25・40~42・44)、他は黄灰~灰白色を呈して胎土には砂粒等が多くきわめて焼きが甘く軟質なもの(4~9・26)である。便宜的に前者を坏D、後者を坏Eと呼称する。

b. 有台坏 図示したものは43の一点のみ。外周部に高台をもつ平で大きな底部に、逆台形とい

うよりは偏平な箱形の体部がつく形態をとる。技法的には、ロクロナデが行われていて、底面は全面に回転ヘラケズリが施されるが、中央部に回転糸切り痕を削り残すものもある。高台はツケ高台。寸法については今回の調査ではよく分からぬが、他例から見ると口径と器高により五種類ほどの群に分かれるようだ。⁽³³⁾

c. 盆 図示したものは23の一点のみ。この23の形態は、偏平な皿をひっくりかえして端部を内側へ屈曲させた形で、天井部の中央に平坦面をもつのが特徴である。平坦面の外周とその外側1cm位に回転ヘラケズリが施され、中央部には回転糸切り痕が残る。有台坏の蓋と考えられるが、他例から見ると、この器種は、端部の形態は同様だが、天井部に明瞭な平坦面を持たずに頂上に擬宝珠形のつまみが付されるものがほとんどであり、本例は非常に珍しい。

d. 壺類 長頸壺・短頸壺・広口壺が見られるがいずれも少量で、図示したのは長頸壺(34)、広口壺(35)のみである。34は中央に回転糸切り痕の残る平な底部外周に高台が付される。

e. 瓢類 中形・大形の甕・広口甕・四耳甕の一部らしきタタキの残る破片があるが図示できるものはなかった。

③灰釉陶器

a. 瓢 17の一点のみ。口縁端部外反し、高台はやや角張る。釉は内面にのみあり、重ね焼き痕が残る。底面には回転糸切り痕が観察される。

b. 皿 3の一点のみ。大きな段皿である。体部外面下半に回転ヘラケズリが施されている。高台先端に重ね焼き痕がある。

(3)墨書・刻字土器

墨書は「生」が4、「東」が5・19、「楊」?が44にある。17のものは字種不明。いずれも体部外面に記されている。刻字は、6の外面に巡るように刻まれている。「在」は判読できるが他は摩滅していくが、文字だけではない可能性もある。

(4)遺構出土土器群の様相と時期

出土土器の重量は、第1号住居址からのものが5581g、第2号住居址からのものが4672g、その他の遺構及び検出面・遺物包含層からのものが2528gで、今回の調査で出土した土器の総量は12781gとなる。土器の種別・器種(及び器形)ごとの重量は表にゆずる。

①第1号住居址出土土器群の様相

本址出土の土器組成は種別・器種で見ると、土師器：坏・椀・皿・鉢・甕E・甕F・小形甕E・小形甕F・須恵器：坏E・甕類、灰釉陶器：碗・皿、から成っている。食器類の坏・椀・皿における土師器：須恵器：灰釉陶器の比率は、66.3%：28.4%：5.3%という数字で、土師器が主体となりながらも須恵器(すべて胎土が軟質の坏E)がまだかなり混じっており、その一方で灰釉陶器が登場してくる状況を示している。土師器の坏と椀の比は24.1%：75.9%、また、土師器の坏と椀における内面黒色とそうでないものの比は、60.4%：39.6%となっている。甕類では、甕E：甕Fが、

99.9% : 0.1%、小形甕E : 小形甕Fが、91.9% : 8.1%である。

②第2号住居址出土土器群の様相

本址出土の土器群の種別・器種組成は、土師器：坏・椀・甕E・甕F・小形甕E・須恵器：坏D・坏E・蓋・長頸壺・広口壺・甕類、からなっている。食器類の坏・椀における土師器：須恵器の比率は、68.8% : 31.2%、須恵器における坏D : 坏Eの比は、86.8% : 13.2%で、坏椀類の主体が須恵器から土師器に移り、しかも須恵器に軟質の坏Eが出現し始めている状況を示している。土師器の坏と椀の比は、97.5% : 2.5%を示し、椀の出現期に近いことを物語る。土師器の坏と椀における内面黒色とそうでないものの比は、70.9% : 29.1%である。土師器の甕類では、甕E : 甕F : その他器種不明なものの比が、80.8% : 0.7% : 18.5%となっている。

③各遺構出土土器群の時期

第1号住居址出土土器群の時期を探るいくつかの指標を列挙すると、土師器の食器類に、坏・椀・皿・鉢が出そろっていること、さらに坏に寸法（法量）の分化が見られること、須恵器の食器類に、蓋・有台坏及び良好な焼成の坏Dがみられず、すべて軟質な焼きの坏Eであること、灰釉陶器が少量あること、等である。これらから当該土器群は、主要な食器類の組成から須恵器が後退し終り、変わって土師器が主流となるとともに、少量の灰釉陶器が混じり始める時期の土器様相を示している。先年報告した南糞遺跡⁽¹⁾及び北糞遺跡⁽²⁾の時期区分の④段階、すなわち主要な食器類が土師器（黒色土器）で占められる土器様式の中頃～後半に位置付けられよう。

第2号住居址出土土器群については、土師器の食器類に椀が少ないと、須恵器に有台坏はないが坏Dが多量にあること、灰釉陶器が皆無であること、等が時期的な指標となる。食器類において既に土師器が主流となってはいるがまだその半分ほど須恵器が残っており、第1号住居址出土土器群よりやや古い様相を示している。上記の時期区分では第1号住居址と同じ④段階の土器様式に属するが、細かくみるとその前半の早い頃に位置付けられよう。

絶対年代の比定については直接導き出す根拠は何もない。先学の研究や学会での討論⁽³⁾の結果によると、土師器が食器類の主体になる土器様式は9世紀の中頃から末葉と考えられており、本例もこの年代観に従っておくのが今のところ妥当であろう。

参考文献

- 1 松本市教育委員会 1984 「松本市文化財調査報告No.29 松本市下神・町神遺跡」
- 2 松本市教育委員会 1985 「松本市文化財調査報告No.35 松本市島立南糞・北糞遺跡・高瀬中学校遺跡、条里的遺構」
- 3 松本市教育委員会 1986 「松本市文化財調査報告No.38 松本市島立北糞遺跡」
- 4 松本市教育委員会 1987 「松本市文化財調査報告No.48 松本市島立北糞遺跡・条里的遺構」
- 5 草 明芳 1987 「松本平における平安時代の食器具一変化とその背景の考察」『信濃』39-4
- 6 小平和夫 1987 「伊那谷における銀棺」『長野県考古学会誌 シンポジウム特集号—信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相—』
- 7 小笠原好春 1971 「丹波土器と黒色土器—土器における二次的表面加工の問題について—」『考古学研究』18-2

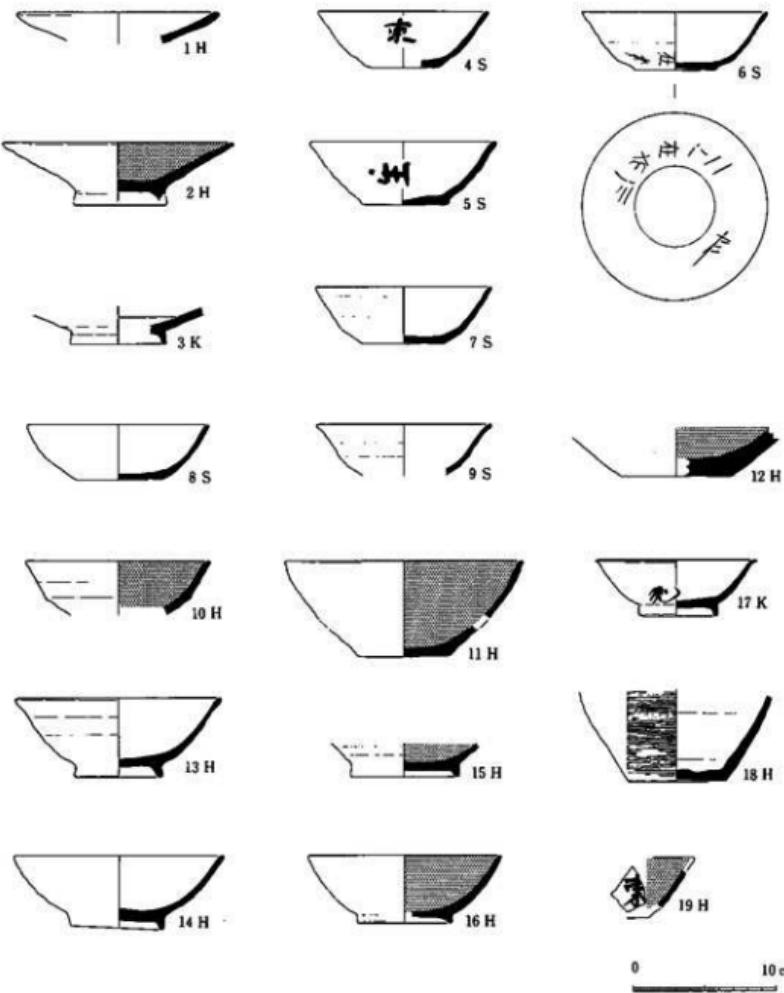
- 1 2・5・8・13・14の7種の环・碗・皿類である。
- 2 器種及び器形の呼称は、文献4（P72～78）に準じた。このため今回の報告では、ある種の器種（土器器型・小形器など）には器形A～Dがなく、E・Fのみということが起こっている。
- 3 土器の内面をいぶすことによって模様を吸着させたものと理解されている（小笠原1971：文献7）。
- 4 下神造跡SKMT第9号住居址出土品（文献1 P110）、北東造跡第35号住居址出土品（文献4 P128）。口縁部肥厚面取りのあるもの：南東造跡第47号住居址出土品（文献2 P107）、南東造跡第6号住居址出土品（文献3 P103）。片口付のもの：北東造跡第21号住居址出土品（文献4 P114）。
- 5 いわゆる武藏型器と呼ばれるものに類似。
- 6 下神造跡SKMT第4号住居址出土品（文献1 P94）、北東造跡第16号住居址出土品（文献4 P110）。
- 7 北東造跡では口径の判明するものが15個体あるが、最少10.0cmから最大16.8cmまでの範囲の中に分散する。今回報告の38は口径22.2cmで最大級のものである。
- 8 須崎芳氏（須崎1987：文献5）、小平和夫氏（小平1987：文献6）によって指摘されている。
- 9 文獻3
- 10 文獻4
- 11 1987年11月7・8日に行われた、長野県考古学会のシンポジウム「信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相」の討論結果による。

各遺構出土土器の種別・器種別重量（単位：g）

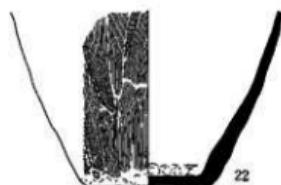
遺構名	土器														計	
	环		碗		环・碗		皿		钵		甕		小形器			
	内黒	-	内黒	-	内黒	-	内黒	内黒	-	E	F	その他	E	F	ロクロ	
第1号住居址	262	6	349	496	230	50	176	116		2622	4		260	23		4594
第2号住居址	448	168		16						1392	12	319	1335			3690
その他	775	110	79						58	1463	243	145	96	140	111	3220
計	1485	284	428	512	230	50	176	116	58	5477	259	464	1691	163	111	11504

遺構名	須恵器										灰陶器					総計	
	环				蓋	甕			甕類	計	碗		皿		計		
	D	E	有台	不明		長頸	短頸	広口									
第1号住居址		671		1					190	862	104	20	1	125		5581	
第2号住居址	249	38			62	168		97	368	982						4672	
その他	695	200	118		25	103	110		330	1581						2528	
計	944	909	118	1	87	271	110	97	888	3425	104	20	1	125		12781	

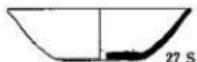
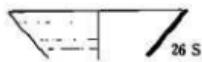
第1号住居址



第12図 出土土器（1）

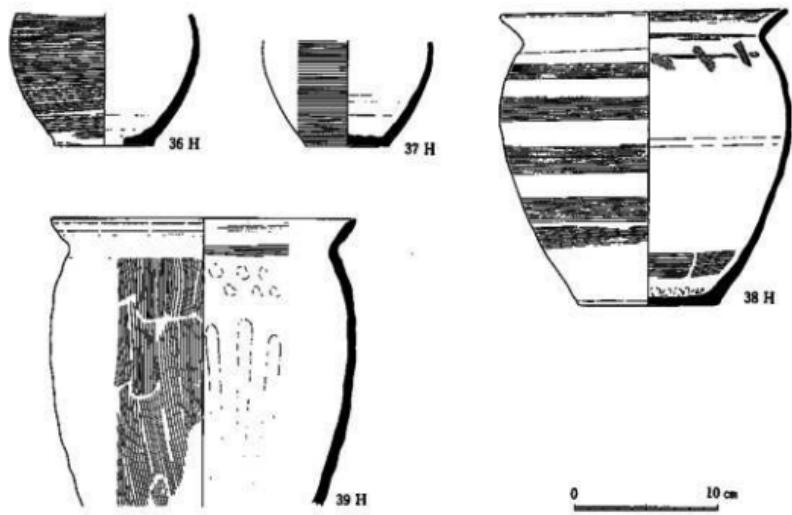


第2号住居址

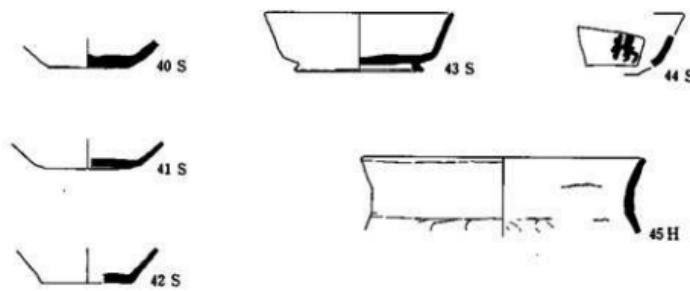


0 10 cm

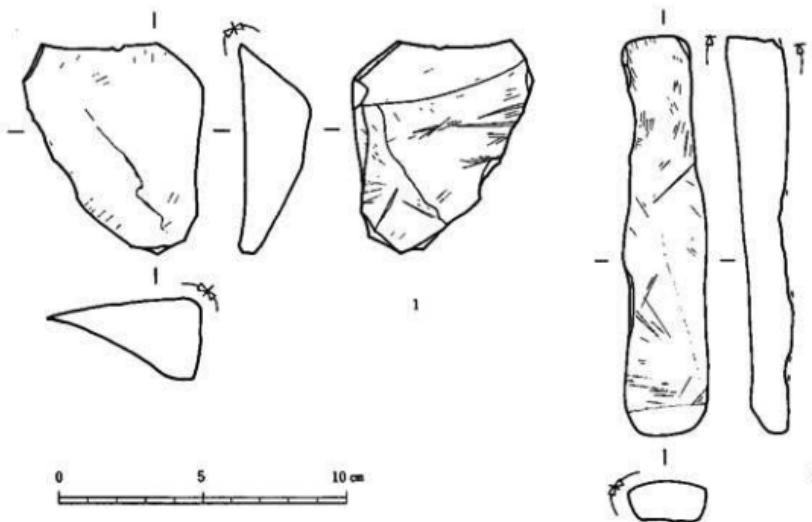
第13図 出土土器(2)



その他



第14図 出土土器(3)



第15図 出土石器

2 石 器

今回の調査で出土した土器以外の遺物は砥石2点のみで、金属製品の出土はなかった。

1は第1号住居址の北東部、床面直上から出土したものである。不整な形状を呈するが完形品である。寸法は最大長7.21cm、最大幅6.22cm、最大厚2.47cm、重量は86.81gである。砥面は7面あり、多くは凹面を呈している。このうち2面には鉄器の刃部によりつけられた線条痕・沈線が観察される。石質は凝灰岩製である。手持ちの中砥石、あるいは仕上げ砥石と考える。

2は検出面で採集されたものである。縦長の直方体の形状を呈し、寸法は最大長13.55cm、最大幅2.89cm、最大厚2.25cm、重量114.20gである。砥面は6面あるが、特に使用されているのは1面のみである。短側面・横側面は凹凸が激しいので余り使用されていない。器面には線条痕が観察されるが、その方向は一定していない。石質は凝灰岩製である。1同様に手持ちの中砥石か仕上げ砥石と考える。

第4章 調査のまとめ

今回の調査地は從来島立条里的遺構とされているなかではやや北寄りに位置している。発掘成果としては、竪穴式住居址3軒、墓址1基、溝6本、土壙12基がある。今回の調査では調査地を面的に発掘することによって、現在の水田耕土の下に旧水田の畦・用水路等を検出することを目的とした。しかし、結果としてはそれらを検出することはできなかった。検出された遺構では、竪穴式住居址2軒が平安時代前期、墓址は中世と考えたい。

調査地周辺では南側から北東にかけては長野県埋蔵文化財センターが三の宮遺跡として発掘調査している。その結果、古墳時代末から平安時代末までの集落址と中世の墓塚群と考えられる土壙群が検出されている。調査地の西側は松本市教育委員会が県道新田・松本線バイパス工事にともなって古墳時代末から平安時代の竪穴式住居址15軒、建物址9棟ほかを調査している。さらに、昨年(1987年)にはその西側に西接する水田を調査し、奈良・平安時代の竪穴式住居址17軒、建物址6棟ほかを調査している。

上記のように、調査地周辺は古墳時代末から平安時代にかけては集落が展開していた。今回の調査地を含めて中央道長野線以西で、松本市教育委員会が島立条里的遺構の名のもとに行なった調査の成果は、三の宮から永田へかけての古代集落の範囲（西への広がり）の検証といえよう。現在の水田耕土下での旧畦・用水路の検出ができない（あるいはないのか）以上、現在の条里的とされる水田区画の上限を推定するのは、検出された竪穴式住居址・墓址の下限以降という大きな範囲の中でしか捉えることはできない。すくなくとも調査地周辺の条里的とされる水田区画は中世以降に形成されたと考えたい。

なお、島立地区周辺は島立条里的遺構内に高岡中学校遺跡・三の宮遺跡・北栗遺跡・南栗遺跡が分布していると認識されている。しかし、これらは最近の調査から個々の遺跡として捉えるよりも、ある年代幅と地域をもった巨大な集落遺跡として捉えたほうがよいと思われる。これには現在の小字等を用いて遺跡のネーミングが行われてしまったことにも原因がある。また、從来の遺跡範囲にも若干の修正が必要になってくると思われる。これらは当地の歴史的位置づけとともに今後に残された課題である。

最後に、今回の調査に当たり三の宮遺跡の発掘に従事されていた長野県埋蔵文化財センターの調査研究員、地元公民館の方々には多大なるご指導、ご協力をいただきました。また、発掘調査が支障なく行うことができましたことは、寒風の中調査に従事された調査員・作業員の方々のご協力とご理解によるものです。記して感謝の意を申し上げます。

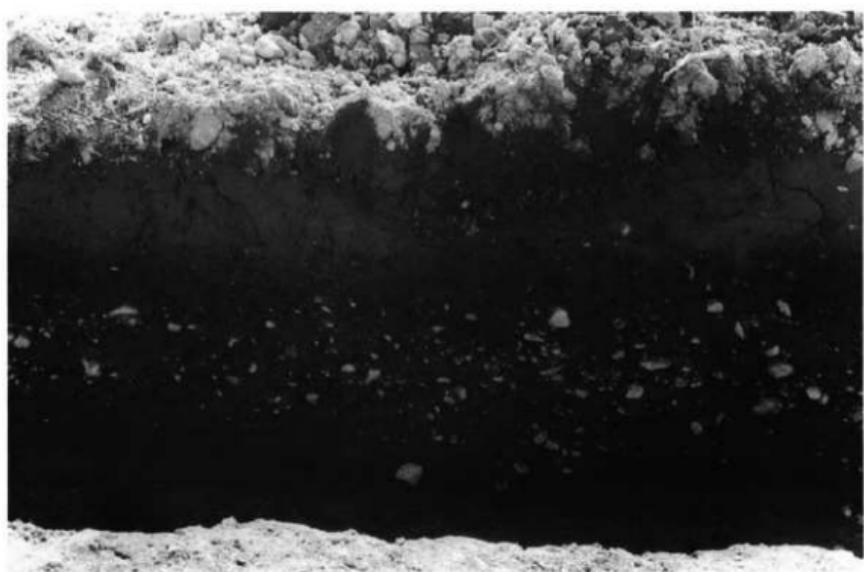
図 版



調査地全景（西から） 写真中央のフェンスが中央道長野線



土層の堆積（トレンチ1 東壁） 上からI（耕作土）・II・III・V・VI・VII層



トレンチ1南壁中央

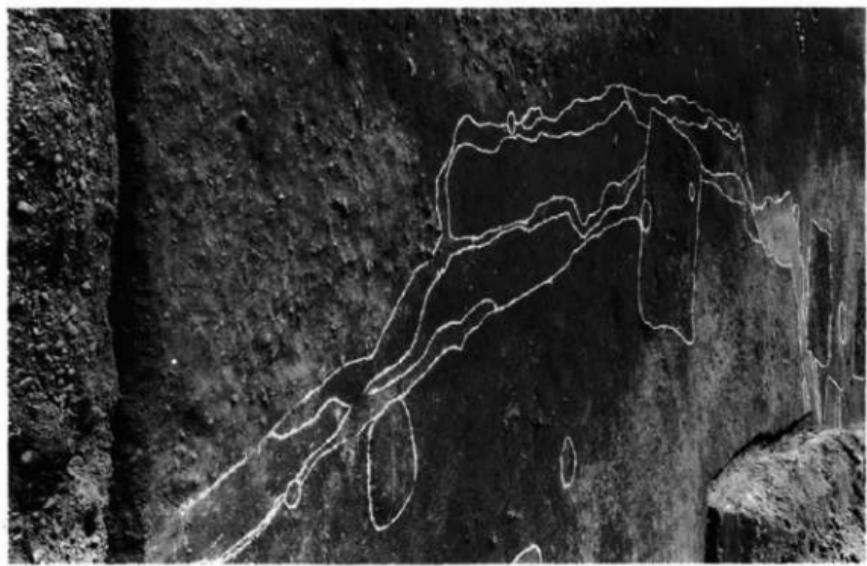


トレンチ1南壁西側



検出状況（東から）

本調査と併行して、県道新田・松本線バイパス工事に伴う発掘調査を上方のプレハブ・テントの西側で行っている。



溝压井跡（東から）

手前から第一・二・三・四・五・六号住居跡・第一号住居跡・第二号住居跡がみえる。



第1号住居址（南から） 覆土第II層の堆積後に礫が投棄されている。



第1号住居址出土状況（西から）

礫は第II層直上にある。床面には土師器・須恵器の环・椀が出土している。



第1号住居址・土器出土状況

土器は住居址南西隅の床面に、伏せた状況で出土している。



土器出土状況（拡大）



第1号住居址・遺物出土状況（東から）

遺物は住居址の南西部とカマド周辺に集中している。



第1号住居址（東から）

床は礫まじりである。カマドは石芯粘土カマドと考えられ、北側に芯材の礫が残っている。



第2号住居址（南から）



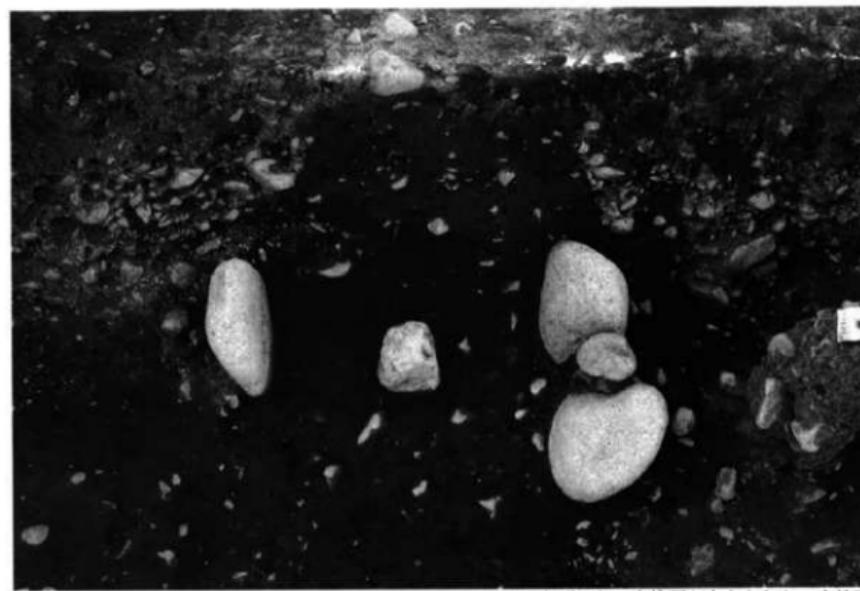
第2号住居址・土器出土状況

床面の中央、やや北寄りで、広口壺の口縁部（35S）
破片に、完形の壺（29S）がかぶさっている。



第2号住居址・土器出土状況

カマド内からは、土師器の甕2点、須恵器の長頸壺の破片・坏などが出土している。



第2号住居址・カマド

カマド内の土器を取り上げると、支柱石があらわれた。支柱石はよく被熱していた。煙道の掘り方がよくみえる。



第2号住居址（東から）

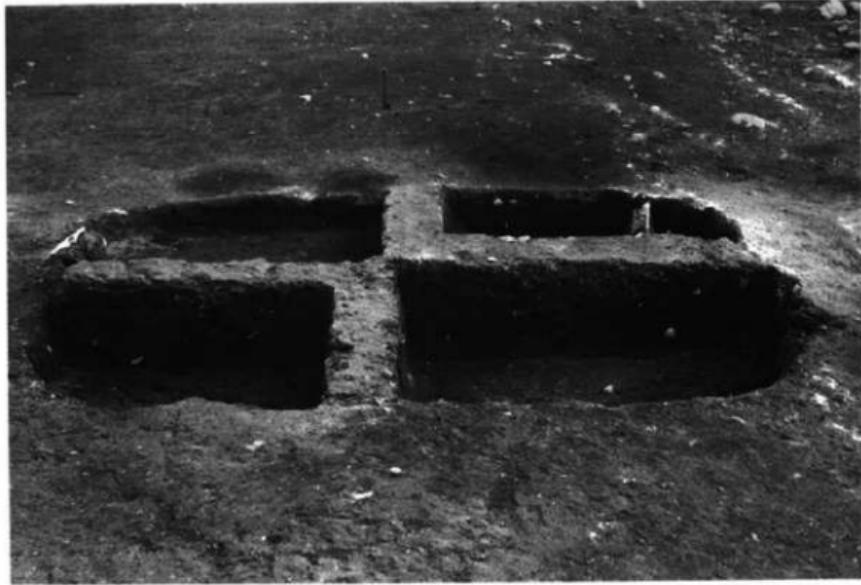
床は砂礫層直上まで掘り込まれているので、礫が一部露出している。左下の大礫は本址に伴うものと考える。



第2号住居址（東から）



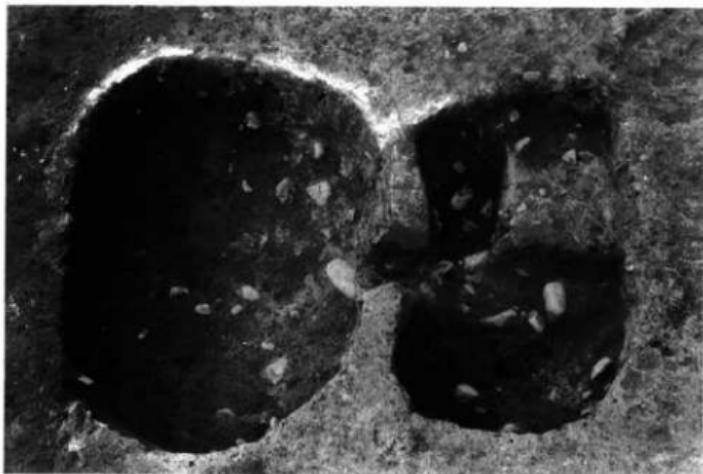
墓址1（北から） 墓壙の中央部から南へかけて骨・炭化物・灰・焼土が出土している。



墓址1（西から）



土壤 1・2



土壤 3・4



トレンチ 7 土層断面 (1)

上から I・II・III・IV・IV'・V 層とつづく。右側で、IV' 層から溝 1・3 が掘り込まれている。



トレンチ 7 土層断面 (2)

左下に溝 1、右下に溝 4・5 (IV 層から掘り込まれる)、溝 2 (IV' 層から掘り込まれる) が観察される。



溝1 土層断面 (トレンチ4の東壁)



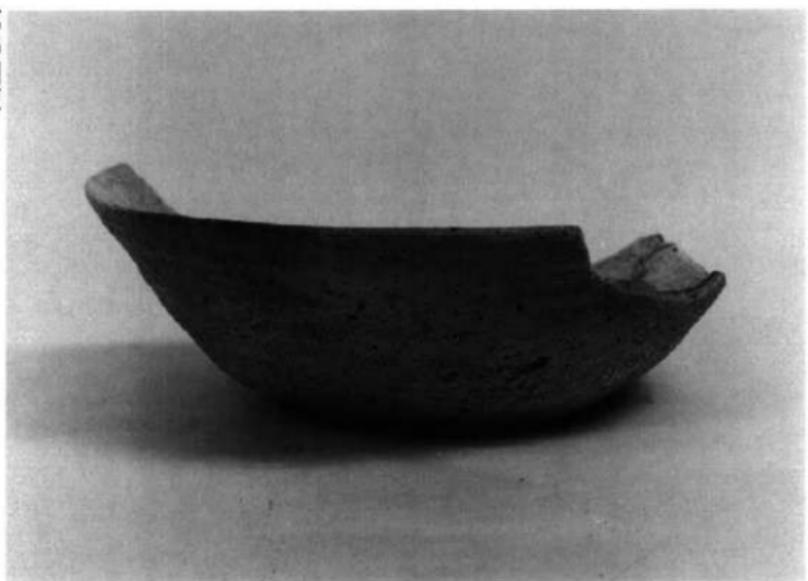
調査地全景 (東から)



第1号住居址 (2H)・皿 以下、数字は図番号。H-土師器 S-須恵器
K-灰釉陶器。



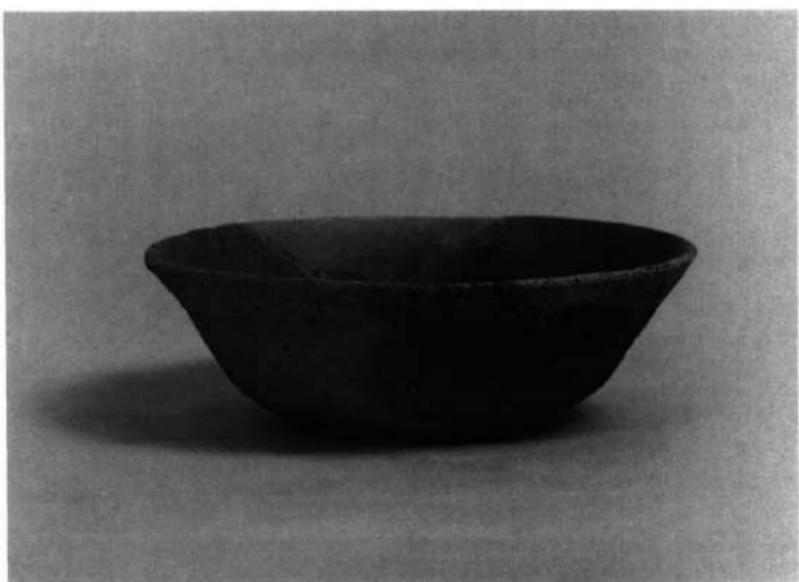
同 (5S)・坏「生」字の墨書



第1号住居址（6S）・坏「在」字の刻書



同（7S）・坏



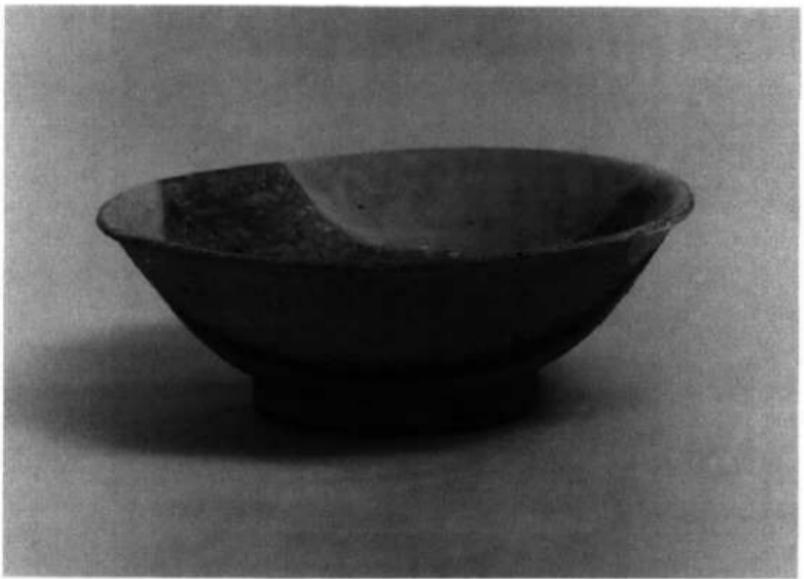
第1号住居址（8S）・坏



同（13H）・椀



第1号住居址 (16H)・碗



第1号住居址 (17K)・碗 判読不明の墨書がある。

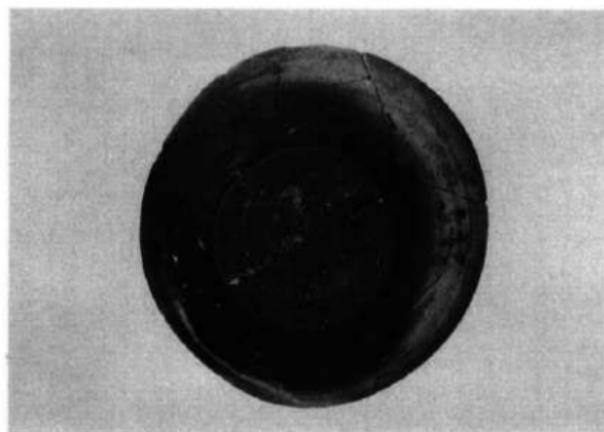


「在」字の刻書（横向き）



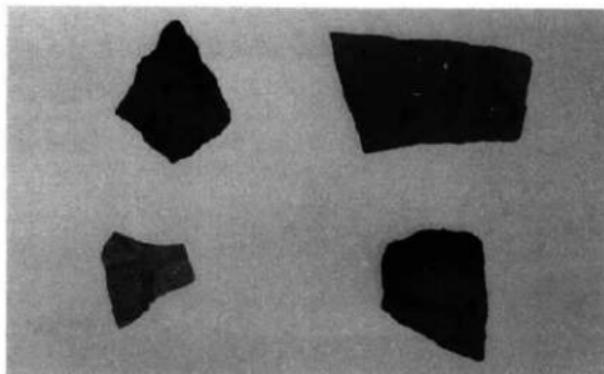
第1号住居址・一括出土土器

第1号住居址 (5S)
・坏「生」字の墨書

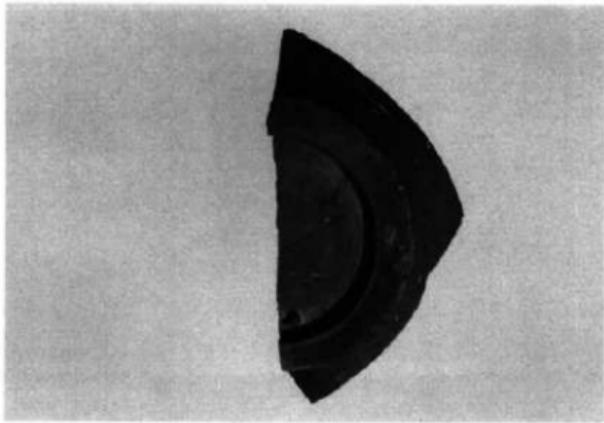


墨書土器

左上「東」 第1号住居址
右上「揚」? 檢出面
左下 不明 檢出面
右下 不明 第2号住居址



第2号住居址 (34S)
長頸壺
ヘラ記号

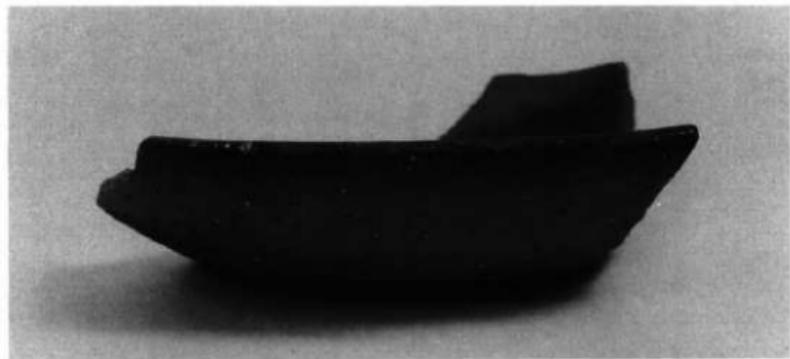




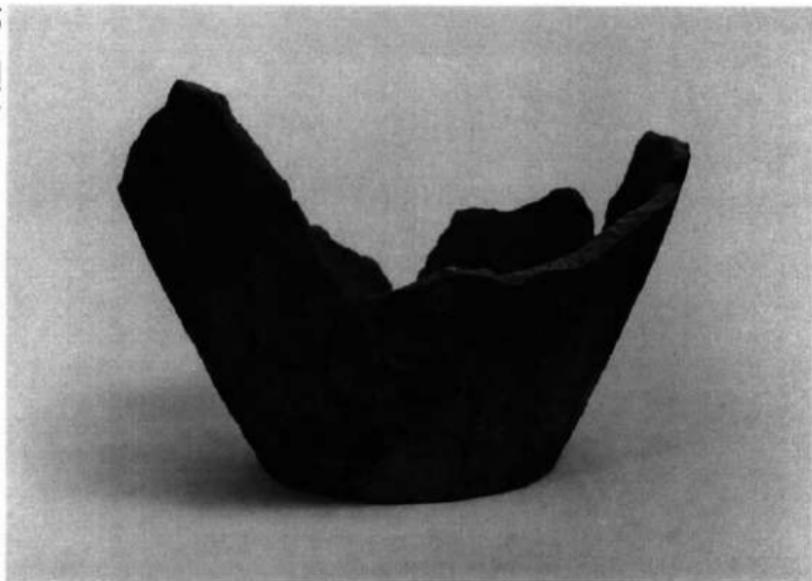
第1号住居址 (4S)・坏「東」字の墨書



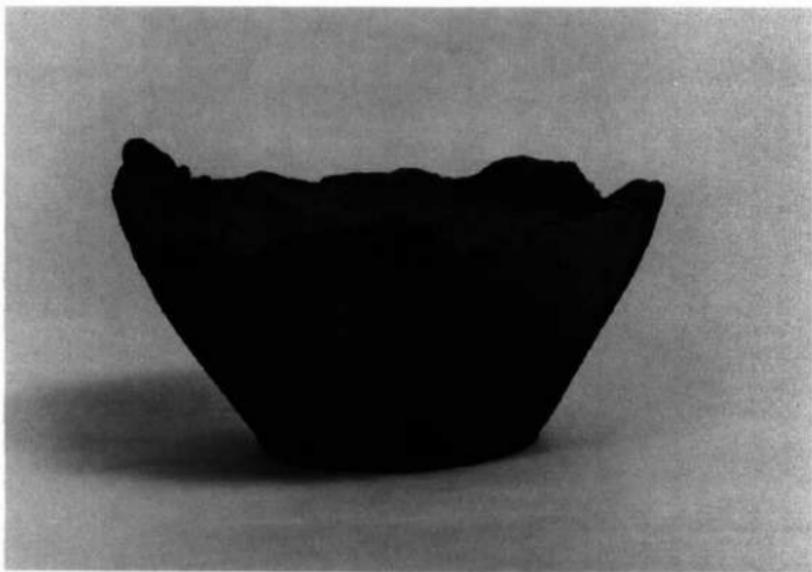
第2号住居址 (24S)・坏



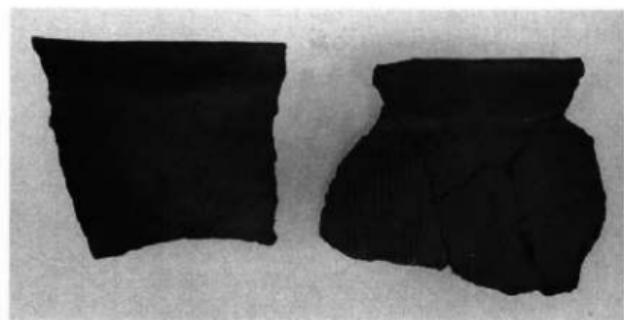
第2号住居址 (25S)・坏



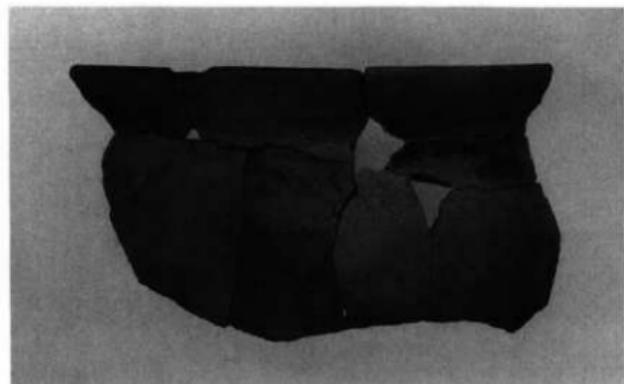
第1号住居址 (22H) · 鼎



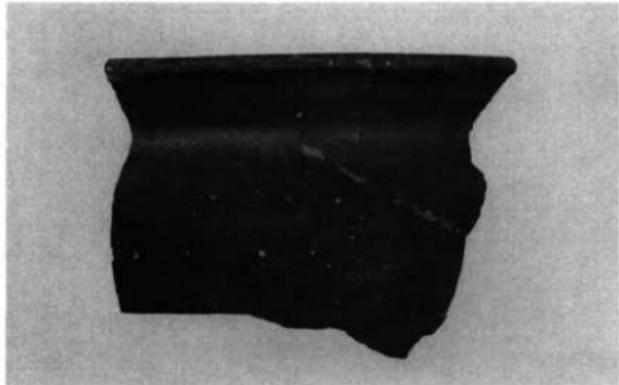
同 · 小形鼎



第1号住居址
甕



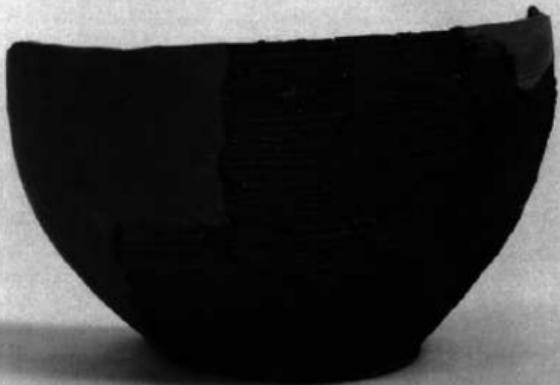
同(21H)
甕



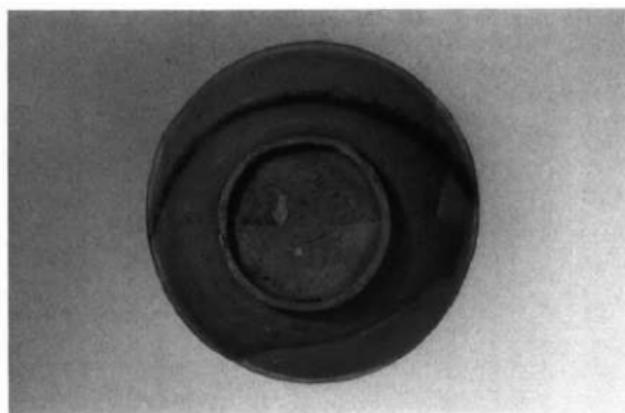
第2号住居址
(35S)
広口壺



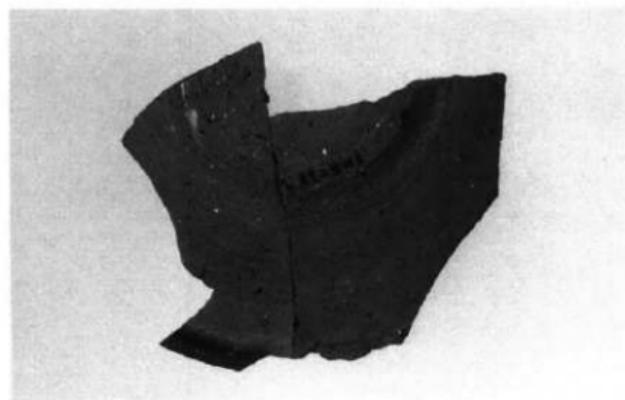
第2号住居址（38H）・甕



第2号住居址（36H）・小形甕



第1号住居址
(17K)・碗(底部)



第2号住居址
(23S)・蓋

検出面
砥石



松本市文化財調査報告No.58

松本市島立条里的遺構

昭和63年3月20日 印刷

昭和63年3月30日 発行

発行 松本市教育委員会

印刷 川越印刷株式会社
